関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

パウロとイエスの邂逅について

著者	川? 幸夫
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	31
ページ	79-91
発行年	1998-03-31
その他のタイトル	St. Paul's Encounter with Jesus Christ
URL	http://hdl.handle.net/10112/16234

パウロとイエスの邂逅について

川嶋幸夫

一

舊約との對比においてキリスト教の革新的な意義をどこに求めるかについてはさまざまな見解があらうが、『マルコ傳』に收錄されたイエスの最初の宣教において、キリスト教の根本精神が最も端的に表明されてゐるといへよう。ヨルダン川でヨハネによつて洗禮を受けたイエスは直ちに荒野へ送られ、四十日に亙るサタンの誘惑を天使の庇護のもとに切拔けたのち、故郷のガリラヤに歸つて「神の福音」について、次のやうに述べた。

「時は充てり、神の國は近づけり。汝らは悔改めて、福音を信ぜよ。」(Πεπλήρωται ὁ καιρός, καὶ ἤγγικεν ἡ βασιλεία τοῦ Θεοῦ· μετανοεῖτε, καὶ πιστεύετε ἐν τῷ εὐαγγελίῳ.)(Marc., 1, 15)

この宣教の前段をなす「時は充てり、神の國は近づけり」においては、イエスの說いた「神の福音」によつて、舊約の終末觀とは根本的に異なつた新しい宗教的事態が出來(シュツライ)したといふことが剩すところなく告知されてゐる。ここで「時」を表示するために使用された καιρός といふ語はもともと季節を意味し、生命の宇宙的なリズムの循環とともに巡る時を指すが、時充ちた時とは、海邊に集まつてきた大勢の群衆に向つてイエスが譬喩を使つて說明したやうに、良い畑に蒔かれた麥や芥子種が豐な結實を迎へた「收獲の時」(ὁ καιρὸς τοῦ θερισμοῦ)にほかならない。イエスの語るところでは、天國の畑には良い種だけが蒔かれたのに、「惡魔」διάβολος が來て毒麥も蒔いたので、畑には毒麥も混つて育つことになる。しかし未成熟な段階では双方の區別が紛らはしいので、收獲の時が來るまでは育つにまかせ、いざ收獲といふ時になつて「まづ毒麥を拔集めて燒拂ふ」ことが定めとなる。かくしてイエスは「收獲の時」が審判の場となることを示し、それが終末觀的見地から語られてゐたことを明白にする。「收獲は世の終りで、刈る人は天使であ」(ὁ δὲ θερισμὸς συντέλεια αἰῶνός ἐστιν· οἱ δὲ θερισταὶ ἄγγελοί εἰσιν.)り、更にこの天使たちを遣る者はほかならぬ「人の子」(ὁ υἱὸς τοῦ

ἀνθρώπου）であると告げられたが、この時のイエスはダニエルが夜の幻のなかで見たといふ「天の雲とともに」現れる「人の子のやうなもの」[7]に自らを重ね合はせてゐたのは疑う餘地がなく、自らにも神の國の全權が父なる神から委託されてゐることを確信してゐたに違いない。このやうに見るならば、イエスの地上における日日の活動は「すべて預言者の書を實現するために行はれた」[8]と解釋されるのは當然であり、それゆゑに、やがてユダの奸計に陷つて虜れの身となつたイエスが大司祭カイヤペーから「お前は神の子たるキリストか」と問ひかけられた際に、「ダニエル書」の幻像を反復しながら、「汝の言ふとほりだ。汝に向つて私はいはう、汝らは人の子が全能なる者の右に坐り、天の雲に乘つて來臨するのを見ることであらう」[9]と閒髪を入れずに答辨したほどである。

ダニエルが閒近に迫り來る未來に想定した終末の日は既にイエス自身の立つ生ける現在として實現されてゐる。このことの自覺が「時は充てり」なのであり、「神の國は近づけり」なのである。「神の國」とは神の支配體制が確立された或る特定の領域を意味してゐるのではなく、神への正しい信仰に貫かれた民衆の現實の生のなかに神の强い力の活動が顯著に認められ、それが一定の擴りをもつやうに意識された情態を指してゐるやうに思はれる。しかしイエスの宣教においては「神の國」に關しては「近づけり」と表現されてゐることを楯に執つて、イエスの場合にも依然として終末は未來にとどまつてゐるといふ反論が根强いかも知れぬが、「近づけり」ἤγγικεν と完了形で事態が示された表現は、別の場面でイエスによつて「……既に神の國は汝らの許に到り着いてゐる」[10]（ἄρα ἔφθασεν ἐφ' ὑμᾶς ἡ βασιλεία τοῦ Θεοῦ.）と述べられたやうに、「既に」ἄρα 神の國が汝らの周りを取圍んでをり、汝らは既にその中にゐるといふ仕方での近さを物語るものといへよう。かくして歷史的時閒の中でイエスが立つてゐる現在は、天より公現したメシアによつて最後の審判が行はれ、萬人の信仰の正邪が裁斷されて、眞理が隅なく明るみに出てしまつた時であり、終末の實現はまた永遠なるロゴスが神とともに在つたと語られる「始め」[11]の反復であることが炳乎として明かになつたのである。

最初の宣教の前段において、イエスはダニエル書の預言が完全に實現されたことを告知したが、後段に移ると一轉して、かかる新しい事態に卽應して、人閒がいかなる仕方で對處すべきかを明示し、嚴しく決斷を迫つてゐる。イエスが求めた事柄は極めて單純であつて、すべての人にとつて行ふにこれほど容易なことは無い筈である。その最初に掲げられたのは自らの罪を直截に「悔改める」といふことであり、ついで神の「福音を」ただ「信仰する」といふことである。救ひに至るべき條件はこれだけであつて、そのためには世俗的な願望に逆らつて日日善行を積むために苦しい克己心を貫くことも命じられず、非人閒的なまでに苛酷な苦行を繼續したり、煩瑣な學識を振りかざして岐路に難澁するなどして、親鸞のいふ「難行の陸路」[12]を顯示することにはいかなる價値も置かれてをらず、努力

の緊張が强制されることも、特殊な方法を習得することも課せられることはなかつた。このことこそ律法的倫理の無力化を宣言するものであり、後にパウロによつて概念化されたごとく、「律法の終」[13] τέλος νόμου が完成したことを告げるものであつた。

メシアの降臨が未來の約束にとどまり、現在における現實の出來事とはなつてゐなかつた舊約の世界においては、現在から未來を遮斷してゐる非連續性を律法の實踐をとほして連續化することが試みられてきた。そこで課せられてゐた律法の實踐は、有限で不完全な人間が自らの善意志を發動して獲得した成果を限りなく積重ねることによつて神の義認を得ようとする絶え間なき努力への信頼に基づくものであつた。しかし有限量をいかに涯しなく加算していつても、終に無限大に到達することはありえないやうに、律法の行爲をとほして神による義認を勸請しようと願ふことは、後にパウロによつて苛借なき批判を浴びたやうに、人間の自己僞瞞が產み出した幻想にほかならなかつた。ましてや終末に來臨すべき神の子が人間の姿を纏つたイエスとして目前に現れ、現在と終末との間に隔りがまつたく失はれた場が開かれ、全存在が眩ゆい眞理の光に照らし出された時に臨んで、もはや神の面前で自己の不十分さを取繕はうとする人間的な慮りは一切何の用をも果し得なくなつたのである。

イエスの發した「悔改めよ」といふ命令は決して個々の人間が犯した具體的な惡業を取上げて、人間としての良心に目覺めることを求めて下されたのではなく、アダムより繼承して來た原罪への無知によつて顚倒された自己意識を悉く棄去ることであり、自己が律法に立脚した善人であることを疑はうとしない自惚の根元を斷てといふ要求であつた。イエスのいふ μετανοέω とは人間が自分自身に對して抱懷してゐるすべての見解と想念、およびそれらを產み出してゐる「自らの精神（νοῦς）を變革すること」を意味する。自らを是認するが如き心の在り樣を更改することは過去つたすべての思ひなし、善意と自負の悉くに邪念が混入してゐたことを「後悔すること」であり、且つまた未來への自戒を含めつつ、自己意識の根源に潛む原罪のゆゑに自らの善意志そのものの無力なることへの怖れにも聯なるのである。かくしてもし「悔改めよ」といふ言ひつけに背いたならば、「良い果實を結ばない木は（斧で）悉く切られて、火中に投ぜられるであらう」[14]とイエスに告げられたやうに、R・オットーのいふ「戰慄すべき神祕」mysterium tremendum の威力が如何ほどのものかといふことに直面した時には、もはや後悔しても時間の不可逆性を思ひ知らされるだけであらう。このやうに「行爲の法」[15] νόμος ἔργων を强制されることからはまつたく無緣な形で「悔改め」が主張された時、そのやうな「信仰の法」νόμος πίστεως に入るためには、超人的な靈性に惠まれることも必要なければ、類稀なほどに强固な意志を錬磨することもまつたく求められてゐない。イエスの宣教は終末の實現である「神の國」がむしろ喜びをもたらすことを告知せんとしたのであり、ただ自らが決して善人に非らざることを知る謙虛さを保つてさへをれば、「神の國」に入る道であ

る「悔改め」と「信仰」が即座に、なんの抵抗もなく、萬人に樂々と開かれてゐる「易行の水道」[16]となる筈であることが示されたのである。この「汝らは悔改めよ」といふ一句につづけて、更にイエスは「福音を信ぜよ」と附加へてゐる。「福音」とはいふまでもなく、律法の世界では未來に想定されてゐた「神の國」が既に到來してをり、罪人の立つてゐる歴史的現在が永遠に充ち溢れてゐるといふ悦ばしき音信である。その「汝らは福音を信ぜよ」（πιστεύετε ἐν τῷ εὐαγγελίῳ.）といはれる「信仰」とは、今まさに開始されようとしてゐる神の審判を前にして、律法の行爲のために必要となる時間が廢絶されたといふ現狀を知つて、一切の人間的思議を放棄することであり、只管に神の恩寵に縋つて、それを受容れることにほかならない。信仰とは人間の意志の産物なのではなく、人間の所行とは無關係に、飽くまでも神の無償の愛による賜物であり、人間の意志によつて左右できるものではありえない。ところでこの聖句においては、πιστεύειν の對象となる εὐαγγέλιον が對格で示されてゐないだけでなく、その前に「中に」を表示する ἐν といふ前置詞がつけられてゐるが、それはおそらく πιστεύειν から他動詞的性格を消すためであらう。動詞の對象が對格で示されると、働きの主體と對象とが主客に二分されて、その間に差別と空隙が殘るのを避けようとする意圖が働き、「信仰する」といふ働きが信ずる者と信ぜられるものとの深い內面的な一致の上にはじめて成立べきものである、といふ理解を踏まへて語られたものと思はれる。

二

前節において素略な仕方で描上げたやうに、最初に行はれた宣教の分析を通して、イエスの宗教の骨子は一往見定めることができたと思はれるが、この福音の革新的な意義を正しく把握して、それを後代に繼承させる基を造つたのはイエスに直接隨伴した十二使徒たちではなく、イエスの同時代人でありながら生前に一度もイエスにまみえようと欲しなかつたパウロであつた。しかし原始教會においてキリスト信仰が確立されてゆく過程において、福音と律法との關係をいかに把へるべきであるかを巡つては信徒の間にさまざまな動搖があつた。更に舊約聖書のみならず、福音書の記述に對しても批判の手をゆるめないグノーシス派の攻勢を排除しながらパウロ主義の採擇が決定的となるまでには、イエスからみて第三世代乃至第四世代に屬する使徒後教父を經て、反グノーシス派の代表的護教家であつたエイレナイオスにいたる一世紀を越える論爭を必要としたのである。この間の經緯を歴史的に辿ると本論文の眼目とするところからはづれてしまふので、ここではパウロに突發したイエスとの邂逅の消息を尋ねることにしたい。

イエス・キリストと遭遇した時の出來事の有無については、パウロ自身は現存する十數通の書簡のなかではまつたく言及してゐないし、またその際の體驗內容についても具體的に振返へることはなるべく避けてゐて、僅に『コリント後書』において「自分はキリスト

の内に在る一人の人閒（ἄνθρωπον ἐν Χριστῷ）を知つてゐる。この人は十四年前に第三の天にまで引去られたことがある――しかしそれが肉體の中に在つたままなのか、それとも肉體を離れてなのかについては私は知らないが、神はそれを知つてゐる。……この人は天國 παράδεισος にまで引去られ、そこで言表す術もないやうな言葉 ἄρρητα ῥήματα が語られるのを聞いたが、このやうな言葉は人閒に向つて語ることが赦されてゐない」[17]といふ風に、第三者的表現として、距離を置いた仕方で語られてゐるだけである。しかしながら「パウロの隨伴者」といはれるルカの手になつたといふ傳承が二世紀にまで遡る『使徒行傳』においては、パウロに對して起つたキリスト公現の出來事が三度に亙つて繰返され、所謂パウロの回心物語といふ形を取つて、パウロの體驗內容とその後日譚にまで踏込んで、可成り詳細に記錄されてゐる。固よりルカによる描寫がどの程度まで史實としての信憑性があるかについては解決困難な問題が殘されてゐるが、しかし『使徒行傳』の記述が『コリント後書』にあるパウロの言葉と著しく齟齬するわけではないので、細部に猜疑心を募らせることはやめて、三つの記事に共通する基本的要素を抽出することにする。

ルカによるパウロの回心物語は『使徒行傳』の九章の一節から十九節、廿二章の三節から廿一節、廿六章九節から十八節に掲載されてゐる。このうち九章と廿二章とは二部構成をなしてゐて、その前半においてはパウロのキリスト體驗が語られてゐるが、後半ではアナニアといふ主の弟子によるパウロへの異敎徒傳道の使命の告知と、それによるパウロの病氣恢復の物語が加へられてゐる。これに對して廿六章ではパウロのキリスト體驗のみで物語が打切られる形をとり、後日譚に當るところもキリストが直接パウロに語つたことになつてゐる。E・トロクメ著『「使徒行傳」と歷史』によると、ルカが記錄したパウロのキリスト體驗の消息は、たとへルカの手が加はつてゐることが閒違ひないとしても、パウロ直傳の原資料を忠實に傳へてをり、特に廿六章の記事は「パウロ自身が書いたか、或いはパウロに指圖されて書かれた」[18]ものと見做しうる。これに反して、九章と廿二章の後半部はルカによる改作であらうと考へられると判定されてゐる。[19] いづれにせよパウロの病氣恢復物語の方は本論文の課題とは直接のかかはりを持たないので、そこは考察の範圍に含めないことにする。さうすると三度繰返へされたパウロの回心物語を構成する基本要素は以下のやうに六つに分けることができる。

㈠ まづキリストの公現が突發して、パウロの回心の場面が急展開を見せるのに先立ち、出來事の前觸れを整へる序曲として、使徒となる以前の呼名であつたサウロによるキリスト敎徒への苛酷な迫害の情景が描かれてゐる。サウロはユダヤ敎隨一の律法學者としての使命感に燃立つて、各地の聖堂を荒し廻り、イエルサレムから逃れたキリスト敎徒を追つて、男女を問はず引捕へては牢獄に入れたり、殺すなどして、「ナザレの人たるイエスの名に逆つて（πρὸς τὸ ὄνομα Ἰησοῦ）さまざまな事をするのを善いこと

だと自分で考へてゐた」（二六、九）。さうして自分がこのやうなことを行つてゐたのを「大祭司も、すべての長老も證言するに違ひない」（二二、五）と告白してゐる。

㈡ このやうに荒狂つてゐた時、イエルサレムの北東約二百キロに位置するダマスコにゐるキリスト教徒を捕縛して、男女にかかはらずイエルサレムに曳連れてきて、處罰を加へるために（九、二）「大祭司連らの全權と委任を受けて」（二六、一〇）ダマスコに赴いた。

㈢ ダマスコに近づいた時、「正午の頃に」 περὶ μεσημβρίαν (22, 6): ἡμέρας μέσης (26, 13) なつて、「突如として」 ἐξαίφνης (9, 3;22, 6) 「天より（强力な）光が出て」 φῶς ἐκ τοῦ οὐρανοῦ (9, 3): ἐκ τοῦ οὐρανοῦ φῶς ἱκανὸν (22, 6) もしくは「太陽にも勝つて輝く光が天から射して」 οὐρανόθεν ὑπὲρ τὴν λαμπρότητα τοῦ ἡλίου …… φῶς (26, 13)、「サウロを取圍むやうにぴかつと照した」 περιήστραψεν αὐτόν (9, 3): περιαστράψαι……περὶ ἐμέ (22, 6)、もしくは「私（サウロ）と私の隨伴者たちを取圍んで眩ゆいばかりに照した」 περιλάμψαν με …… καὶ τοὺς σὺν ἐμοὶ πορευομένους (26, 13)。

㈣ 電光に打たれた「サウロは地面に倒れ」 ἐπὶ τὴν γῆν (9, 4): εἰς τὸ ἔδαφος (22, 7)、もしくは「われわれ一行全員は地面に倒れ落ち」（二六、一四）

㈤ ほとんど意識を失つて、夢見心地の情態で、サウロは次のやうに語りかける[20]「聲」 φωνή を聞いた。「サウロよ、サウロよ、何故に汝は私を迫害するのか」 τί με διώκεις; (9, 4:22, 7) もしくは「サウロよ、サウロよ、何故に汝は私を迫害するのか。刺針のついた突棒を蹴らうとしても[21]（πρὸς κέντρα λακτίζειν）、お前には無理だぞ」(26, 14)。

㈥ この聲を聞いたサウロは、聲の持主がおそらくイエスであることを半ば了解しながら、「主よ、あなたは如何なる方ですか」 (Τίς εἶ, Κύριε;) と問うたのに向つて、主は「私は汝が迫害するイエスなのだ」（Ἐγώ εἰμι Ἰησοῦς ὃν σὺ διώκεις.）と答へたが、ここまでは三つの記事はほぼ同じ文面になつてゐる。ここでイエスが「私は……である」（Ἐγώ εἰμι ……）といふ文形で强く語つてゐる場合には、『ヨハネ傳』でも何度か見られるやうに、自らを終末觀的現在に立つてゐる主として顯示する氣持をはつきりと打出してゐると考へられよう。

「天よりの光」のなかから地上に倒れたサウロに向つて自らが何者であるかを證したこの言葉につづく文言は最初の二つの記事では大同小異であつて、九章では「いざ起きよ、それから町に入れ、さうすると汝がなすべき事柄が汝に向かつて告げられるであろう」（九、六）と誌され、廿二章では、イエスの答を承けて、パウロが「主よ、私は何をしなければならないのでせうか」と尋ねたのに對して、主は「起きてダマスコへ往け。彼の地にて、汝のなすべきこととして定められたすべての事について、汝に語られ

るであらう」（廿二、一〇）と告げてゐる。しかるに廿六章では、わざわざパウロを擇んで自らを現はしたイエスが如何なる意圖に基づくのかを説明しようとして、「いざ起きよ、そして汝の足にて立て」と言つたのに引續いて遙に長い文を示してゐる。

「私が汝に現れたのは、汝が私をどういふ風に見たかといふことと、これから私が汝に現れて示すことになつてゐるさまざまなことについて證人となることによつて、汝を私の召使とすることを意圖したためである。私が汝を（イスラエルの）民衆や異邦人の許に派遣するのは、彼らの眼を見開かせ、暗闇から光へ、サタンの權力から神へと立歸らせ、更に私への信仰によつて彼らが罪の赦しや淨められた人人への仲間入りが授けられるためであるが、汝が彼らの手から逃れられて必ず救ひ出されるやうに手筈を整へてあるのだ」（廿六、一六―一八）、と。ここで飜つて九章と廿二章を見渡すと、パウロが異邦人への使徒となる使命は、「かの光の輝きに遭つて目が見えなくなつた情態で」（廿二、一一）ダマスコへ連れてゆかれ、三日間飲食を斷つた後に、アナニアによつて告げられたことになつてをり、更に廿二章では、それから後にイエルサレムに歸つたパウロが神殿に入つて祈つてゐる時に「忘我の情態に」ἐν ἐκστάσει 陷つてゐると主が現れ「嘗て主の證人であるステパノの血が流された時、その傍に立つてをりながら、やはり石擊ちに贊同した（廿二、二〇）やうな自分にその資格があらうかと尻込みするパウロを奪ひ立たせて、「往け、私が汝を遠くにゐる異邦人の許に遣はすのだから」（廿二、二一）と、主が直接パウロに命じた形になつてゐる。このやうに考察してくると、サウロに對するイエス公現の理由説明に關しては、三つの記録はほぼ一致してゐるとみてよいであらう。

三

『使徒行傳』における三ヶ所の記述を分析し、比較することをとほして、パウロに對するイエス公現の情景が六段階に整理され、その詳細が明かになつたところで、そこから問題點をいくつか採上げて、若干の檢討を加へることにしたい。

まず最初に、ユダヤ教における最も權威ある律法學者として知られてゐたパウロがキリスト信仰に入る直前まで、キリスト教徒に對して非理非道に趨り、暴虐の限りをつくしてゐたといふことである。勿論このことのゆゑを以てパウロが無頼の輩であつたといふのではなく、聖なる律法を護持しようとする熱意のあまりに、過度に崇高な信念の虜となつたのである。就中その最たるものとしてパウロの記憶が足枷となつたのは、「その顔容が天使の顔容とそつくりになつた」[22]ステパノについてであり、いかに唆かされたからとはいへ「彼がモーセや神を瀆す言葉を吐いた」[23]と僞證した連中が町から追放されたステパノに石を投げて殺す直前に、「自分たちの衣服をサウロと呼ばれた若者の足許に置いた」[24]のを受取り、その番をした揚句に「ステパノの殺害に贊同した」[25]ことであつた。これはステパノ

によつて難詰されたやうに、「常に聖靈に逆つて」ゐるために「項が硬直してをり、心にも耳にも割禮を受けてゐない人人」の所行であり、かくしてサウロも彼らと同じく「義人を賣飛ばし、殺害する者」[26]たちの先陣を切つてゐたのである。このやうな行狀はキリスト教徒の側から見ればそこに善意志のかけらも見出せないことになり、神の恩寵に浴する資格は皆無の情態といへる。したがつて彼はステパノのいつたやうに、「汝らは天使たちの命令によつて定められた律法を受取つてをりながら、やつぱりそれを遵守しなかつたのだ」[27]と斷罪されるよりほかはなかつた。それにも拘らず、イエスは彼の惡業のすべてを見通してをりながら、自らが復活のロゴスとして公現すべき相手にサウロを擇んだのである。

次に、廿二章と廿六章で、キリスト公現の時刻が「正午の頃」とされてゐるのに注意を拂ふ必要があらう。

「正午」といふ時刻に大きな哲學的意義を見出した思想家としては誰しもニイチェの顏を想浮べるであらう。彼にとつて正午（der Mittag）とはディオニユソス的生命の象徵である太陽が南中してツアラトウストラの頭上に達し、影の最も短い、光に溢れた瞬閒であるが、ツァラトゥストラにとつて降注ぐ陽光は一切の時を飛散させ、怖るべき永劫回歸の相の下で世界をニヒリズムの完成態として照らし出す働きをする。「永遠の湧出る泉」（Brunnen der Ewigkeit）と化した正午はそのまま「晴朗の氣に溢れつつ身の毛のよだつやうな正午の深淵」[28]（heiterer schauerlicher Mittags-Abgrund）に變貌する。しかし一切が倦み疲れて睡りこけるやうな靜けさのなかで、「灼熱する青銅、稻妻を孕んだ雲、膨れ上る乳房と同じやうに……、自分の星を求めて、發情期に狂ふ矢となつて……（運命に對する）勝利を迎へるべく殲滅に向けて用意萬端整へ了つた假借なき太陽の意志」[29]（gleich glühendem Erze, blitzschwangrer Wolke und schwellendem Milch-Euter:——……ein Pfeil brünstig nach seinem Sterne:——……ein unerbittlicher Sonnen-Wille, zum Vernichten bereit im Siegen!）が最高度に溢れてゐるのが「大いなる正午」である。しかしそれは靜けさを破る「祝福された電光の時刻」（gesegnete Stunde des Blitzes）として自らの祕密を曝け出す。その時には「あつといふ閒に燃擴がる火焰」（Laufende Feuer）となつて「炎の舌で告知する者たち」[30]（Verkünder mit Flammen-Zungen）が現れ、「さまざまな事が歷歷と顯はにならずには措かない」（da soll vieles offenbar werden!）「首斬り刀」[31]（das Richtschwert）となつて、「大いなる正午」は人類に近づいてくる。

『かくの如くツァラトゥストラは語つた』の中で繰返し現れる「大いなる正午」の眞相を當座の關心に引寄せて以上のやうに素描してみたが、それをパウロへのキリスト公現の場面に對比させるならば、高貴なるイエスのキリスト教をユダヤ人特有の劣弱者のルサンチマンの宗教に變造し、生と大地に對する憎惡の念で塗り潰した元凶と極めつけて、仇敵のごとく罵倒されたパウロと、自らを「神を無みする者」der Gottlose と高らかに宣言したニイチェとの閒に、

實に驚くべき照應が見出されることに氣がつくであらう。太陽がパウロの頭上に高く輝き、苛酷な光線の矢に充ち溢れた碧空のもと、灼熱の大地に突如として電光が燦く。本當のところダマスコへと急いでゐたサウロの行路が晴天に惠まれてゐたかどうかは定かではないが、多期以外には雨は降らぬ筈のシリアといふ土地のことであり、しかも天候が急變したことは明かである以上、天空には「晴朗の氣に溢れ」てゐたに相違あるまい。但しディオニュソス的生の舞踏者であるツァラトゥストラにとつては「大いなる正午」の季節といへば眞夏でなくてはならなかつたのに對して、ダマスコに近づいたサウロの季節が特定できないのは殘念なことである。とはいへ、「主の弟子たちに對して、依然として恐喝と殺害の氣持が吹荒れてゐた」[32] サウロには、燒けつくやうな夏の日の熱氣がふさはしい。また「炎の舌」の譬喩は直接パウロには結びつかないが、『使徒行傳』の書出しのところで、イエスが昇天した後、ペテロを中心として多くの信徒が集つてゐたが、五旬節（Pentekoste）——ドイツ語では聖靈降臨祭（Pfingsten）——の日に、つまりそれはもう夏といつてよからうが、「突然天から（ἄφνω ἐκ τοῦ οὐρανοῦ）烈風でも吹いてきたやうな騷めきがして、彼らが坐してゐる家屋全體に響渡り、それから火のやうなものが數々の舌に分れて（διαμεριζόμεναι γλῶσσαι ὡσεὶ πυρός）、一人一人の上に止つたのが見えた。彼らは皆聖靈に滿たされて、御靈に宣べられるままに、各人が異なる外國語で話し始めた」[33] といふ記事が見られる。このことから尖端が細かく舌狀に分れた火の形象が當時オリエントから北アフリカに及ぶ各地の諸言語で行はれた宣教活動を表示してゐることが知られるので、聖靈から出た「炎の舌」が本格化するのはむしろ異邦人の使徒としての使命を託されたパウロにおいてであるといへよう。

ところでニイチェ文獻學の進展に劃期的な貢獻を果したシュレヒタには『ニイチェの大いなる正午』といふ優れた小册子があるが、彼は「精靈の出沒する時閒」[34] Geisterstunde としての「正午」の系譜を古代からニイチェにかけて調べ上げることによつて、ニイチェの思想の知られざる祕密を探索することに成功してゐる。彼は「自然に敬虔の念を懷いてゐたギリシア人やローマ人たちにとつては……夏の日の森や山地で過す正午の時閒は神々が顯現するための時閒であり、それは今日でもなほ何となく無氣味な氣配を漂はせてゐる」と述べて、「正午になるとヘカテーが出現し、ニンフたちが踊り、サチュロスたちは峽谷の木陰から姿を見せ、精靈たちが走廻る」[35] といつた事例を、さまざまな詩句を典據にしながら列擧してゐるが、更に正午の時刻がゴルゴタの丘でイエスの磔刑が行はれた場面でも重要な役割を演じてゐることに觸れてゐる。イエス處刑の時閒割に關しては共觀福音書の記述は一致してをり、「朝の九時頃」[36] にイエスを十字架につけ、正午から「太陽が光を失つて」[37] 地上が一面に暗くなつて午後三時まで續いた。三時になると「聖所の幕が上から下まで裂けて二つになり」[38]、イエスは大聲で叫んで父なる神に呼びかけた後、息絕えた。シュレヒタによると、丁度正午に「長時

間に亙る日蝕が組込まれ、キリストの死去にいたるまで持續する」といふことは「當日の正午が夜に變貌してゐる」[39]ことを示してゐるのであつて、このことは神が自らの神性を顯示する時刻に墓が開かれて死者が復活することに通じてゐるといふことである。眞晝が直ちに眞夜中に接續してゐるといふことも『かくの如くツァラトゥストラは語つた』のなかで何度も繰返されるテーマであつた。このやうに見てくるならば、サウロに對するイエス公現の時刻が「正午の頃」であつたのもまことに宜なる乎と思はれる。

「正午」と並んで、これに劣らず注意さるべきことは「天よりの大いなる光」の出現が「突如として」ἐξαίφνης 起つたといふことが强調されてゐることである。時間の流れを斷切る突發的な事態を表すこの言葉はプラトンにおいて數ケ所にその用例が見出されるが、[41]いづれも肉體との混合情態から淨化されて、純粹に知性的となつた靈魂が認識の方向を現象界より全面的に轉回させ、イデアをそれ自體として直觀する場面で用ゐられてゐる。またパウロよりも約二百年時代が下るプロティノスにおいても、叡知界の更に彼岸に休らつてゐる一者を、純粹に叡知的となつた靈魂がほんの一瞬だけ垣間見る幸運に惠まれるといふ場面で語られた用例[42]が若干見出される。かくして ἐξαίφνης といふ語は、ギリシア哲學においては最高度に叡知的且つ神的な、存在全體の第一原理となるものに對する神祕的直觀が成立つ極めて稀な場面で登場する光輝ある用語なのであり、神格化された趣を呈してゐる。ルカが「天よりの大いなる光」の出現の様子を ἐξαίφνης と表現した時、この語の哲學的含蓄にどれほど通じてゐたのかは不分明であるが、現前せる眞實在の直知といふ點において、見事な照應を見せてゐるのには驚きを禁じえない。

しかし「突如として」眞理の光に包まれたといふことは、イエスの出現がパウロにとつてもまつたくの不意打ちであり、それに對するいかなる準備も整つてゐなかつたことを示してゐる。律法の立場では最大限に善行を盡してゐたにも拘らず、キリスト教的觀點に立てばサウロは極端な罪人であり、福音に對する完全な無知の暗闇に沈淪してゐたのである。ダマスコに向つてゐた彼の頭上に擴がる正午前の光は實は僞りの自己認識から差してゐた虛妄の闇であつたのであり、彼を打ち倒した電光はパウロ神學の影響下に書かれたといはれる『ヨハネ傳』が語ることになるやうに、まことに「光は暗きに照る」[43]（τὸ φῶς ἐν τῇ σκοτίᾳ φαίνει）のであつた。

光が彼を照らした時、罪人サウロが立つてゐた、死に到るべく規定されてゐた歷史的現在が永遠なる神の現前の場となつた。パウロ自身はこの瞬間を自らの書簡のなかで「今」νῦν と表現し、その「今」は「律法から離れ」[44]たところに開かれたと語つてゐる。このやうなパウロの「今」こそイエスの宣教で揭げられた「時充ちた時」を反復するものにほかならない。天上からの强力な光に取圍まれ、瞬間の現成の衝擊に遭つて、パウロは地上に打ち倒された。このことはパウロの「外なる人」[45]が壞され、「わが內に宿る罪」[46]によつて肉の奴隷となり、「死の體」[47]となつてゐた「われらの舊き人がキリ

ストとともに十字架に付けられた[48]」といふことを指してゐる。かくして「律法の行爲[49]」ἔργα νόμου の權化であつたサウロが「律法に依りながら律法に死んだ[50]」(διὰ νόμου νόμῳ ἀπέθανον) のをおそらく見屆けたところで、イエスはサウロに向つて語りかけ、自らが神の子であることを證したのであらう。

イエスがサウロに神の子として語つた時、イエスはもはや地上において人性を纏つた、愛肉せるロゴスとしてではなかつた。イエスが受取つた人性は既に十字架の上で死んでゐたのであり、それゆゑに人間の姿を現して、地上で宣教活動をしてゐたナザレの人イエスの同時代人となる機會をパウロがもつことはなかつた。パウロが思ひもかけなかつた仕方で邂逅を果したのは、十字架上で一切の人間的な死を死ぬことによつて、死より復活した靈としてのキリストであつた。それゆゑにサウロは肉の相を纏つたイエスと一度も會はなかつたが、主の聲を聞いた時はその聲の持主が主であることが直に分つたのである。これに反してイエスの同時代人として、地上に現れた主と絶えず接觸してゐた十二使徒たちは主の人性に惑はされて、イエスが神の子であるといふ確信がしばしば動搖し、イエスの方でも自らが神の子であることを露はに示さうとはしなかつた。

以上のごときパウロのイエスとの邂逅をめぐつて、近代といふ不信仰の時代の唯中にあつて、眞正な仕方でキリスト信仰を成立させる條件を見出さうとして苦難の道を辿つたのがキェルケゴールである。彼は罪人の道を極限まで歩んだパウロに現成した永遠の現在化といふ出來事を「キリストとの同時性」(Gleichzeitigkeit mit Christo) と表現し、このパウロの場合が近代人にもキリスト信仰を可能にする範例となるものであり、したがつて「キリストとの同時性」こそ近代人である自分にとつて「私の生涯を賭けた思想[51]」der Gedanke meines Lebens と表明してゐる。本論文の出發點は實はパウロのキリスト經驗の本質的意義をキェルケゴールの思想を據點として考察を試みるところに置かれてゐたのであるが、その機會はまたいつの日か突如として訪れることであらう。

註

(1) 同じ箇所は、Vulgata 譯では "Quoniam impletum est tempus, et appropinquavit regnum Dei.; poenitemini, et credite Evangelio," C. Weizsäcker 譯では „die Zeit ist erfüllt und das Reich Gottes herbeigekommen, thut Buße und glaubet an das Evangelium." となつてゐる。マルコ傳のほかにイエスが宣教した「神の福音」を記錄してゐるのはマタイ傳 (四、一七) のみであるが、そこでは「汝らは悔改めよ、なぜならば天國が近づいたからである」(Μετανοεῖτε· ἤγγικε γὰρ ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν.) と簡略化された形になつてゐるばかりでなく、「時は充てり」の句が削られたことによつて舊約のダニエル書に現れた終末觀との對比が分明でなくなり、また悔改めと福音信仰との結びつきが伏せられたことによつて、律法と恩寵との間に介在する深い裂目に蔽ひがかけられてしまひ、微溫的な表現にとどめる意圖が働いたかに思はれる。それに對してイエス・キリストが神の子たるメシアの資格で活動したことを强調するマルコ傳の記述はイエスにおいて體現された終末の現在化に含蓄されてゐた革新的な意義を十分に傳へるものとなつてゐる。

(2) マタイ傳一三、三〇。
(3) 同 一三、三九。
(4) 同 一三、三〇。
(5) 同 一三、三九。
(6) 同 一三、四一。
(7) ダニエル書七、一三—一四。
(8) マタイ傳二六、五六。
(9) 同 二六、六三。
(10) 同 一一、一八。
(11) ヨハネ傳一、一。
(12) 『教行信證』行卷、岩波文庫版一一八頁。
(13) ロマ書一〇、四。
(14) ルカ傳三、九。
(15) ロマ書三、二七。
(16) 註(12)に同じ。
(17) コリント後書一一、一一—四。
(18) E・トロクメ著（田川建三譯）『「使徒行傳」と歴史』（新教出版社昭和四四年刊）二七〇頁。
(19) 同 二六九頁。
(20) Les actes des apôtres: Texte traduit et annoté par Edouard Delebecque の脚註において、この箇所で une voix とだけ述べて、これにつづく「一時的な失明情態」にまったく觸れてゐないのは、パウロがあまりにも常軌を逸脱した事柄くの信仰を自分の隨伴者に强要することを避けたからに違ひない、と述べられてゐる。(voir, p. 126)
(21) ギリシア人の間ではよく知られてゐた格言 (Delebeque, op. cit. および Les actes des apôtres, Introd. de M. L. Cerfaux et Trad. et note de J. Dupont, p. 265) であつて、抵抗の無益なることを示す (J. Dupont, op. cit. および La Bible, Nouveau Testament, Introd. p. J. Grosjean, Textes trad., présentés et annotés p. J. Grosjean et M. Léturmy, p. 438)。突棒とは勞役用の牛に對する鞭として使はれるが、牛がこれに刃向ふことは自らを傷つけることになるだけである。パウロはこの格言を「イエスの名前に反抗することによつて、自分が陷つてゐた不法行爲の情況」(Dupont, op. cit.) を特徴づけるために轉用した。
(22) 使徒行傳六、一五。
(23) 同 六、一一。
(24) 同 七、五八。
(25) 同 八、一。
(26) 同 七、五二。
(27) 同 七、五三。
(28) Friedrich Nietzsche, Also sprach Zarathustra, IV: Mittags; Bd.II, S. 515（ニイチェの作品からの引用はすべて Friedrich Nietzsche, Werke in drei Bänden, Hrsg. v. Karl Schlechta, C. Hanser に依る）。
(29) a. a. O., III: Von alten und neuen Tafeln, 30; Bd. II, S. 460—461.
(30) a. a. O., III: Von der verkleinernden Tugend; Bd. II, S. 422.
(31) a. a. O., III: Von den drei Bösen, 2; Bd. II, S. 439.
(32) 使徒行傳九、一。
(33) 同 一一、一一—四。
(34) Karl Schlechta; Nietzsches großer Mittag, S. 9.
(35) a. a. O., S. 35.
(36) マルコ傳一五、二五。
(37) ルカ傳二三、四四。
(38) マタイ傳二七、五一。
(39) Karl Schlechta; a. a. O., S. 17.

(40) マタイ傳二七、五二參照。
(41) Platon ; Gorgias 523E, Symposion 210E, Politeia 515C et al.
(42) Plotinos ; Enneades V, 3, 5, 15; VI, 7, 36, 18.
(43) ヨハネ傳一、五。
(44) ロマ書三、二一。
(45) コリント後書四、一六。
(46) ロマ書七、二〇。
(47) 同 七、二四。
(48) 同 六、六。
(49) 同 三、二八。
(50) ガラテア書二、一九。
(51) Søren Kierkegaard ; Der Augenblick, übers. v. Hayo Gerdes, Gesammelte Werke, 34. Abteilung, S. 283, E. Diederichs.